(3) 感染症検査担当

調査研究名	研究の概要
札幌市における感染症の流行特性（感染性胃腸炎） 研究担当者：扇谷陽子 研究期間：平成 23～26 年度	【目的】 感染性胃腸炎は、ウイルス、細菌等の感染により嘔吐や下痢などの症状を呈する症候群で、晩秋から冬にかけてはノロウイルス、春先はロタウイルスを病因とする発症が多い。特にロタウイルス感染での発症は、乳幼児では入院を要する症例も多く、注意が必要である。そこで、今後の流行に際して、予防とまん延防止のための情報発信を目的に、札幌市における感染性胃腸炎の流行状況の解析を実施した。 【方法】 対象は、感染症発生動向調査において 1999 年 4 月（第 13 週）～2014 年 12 月（第 52 週）の期間に、札幌市の小児科定点医療機関（定点数：37）から感染性胃腸炎患者として報告のあった 128,917 名とした。患者情報は、厚生労働省の「感染症サーベイランスシステム」および「感染症発生動向調査事業年報」より入手した。 【結果】 札幌市における週毎の定点あたり患者報告数について、一年を通じて報告があるが、晩秋から春にかけて報告数が増加し、夏に減少する季節的な増減の傾向が確認された。ピーク時の報告数の増加状況は年毎に異なり、時期は多くの年で 11～12 月頃であった。しかし、2009、2011、2014 年はこの時期に報告数があまり増加せず、ピーク時期は 4～5 月頃であった。 全国的な状況との比較では、報告数が増加する時期はほぼ同様であるが、ピーク時の定点あたり報告数が全国的な状況より少ない傾向にあることが確認された。 年別年齢別患者報告割合について、例年 1 歳の報告割合が最も高く 15%前後で、次いで 2～4 歳の割合が高くそれぞれ 10%程度であることが確認された。 【考察】 今回の解析の結果、流行する季節、流行時の患者報告数の増減の状況及び患者年齢の傾向を確認することができた。今後も、同様な解析を継続することにより知見を蓄積し、感染予防の注意喚起などの啓発に役立てていきたいと考えている。